第５章　支援を必要とする子どもの保育環境

一人ひとりが安心してその子らしさを発揮できる個に応じた環境の構成

特別な支援を要する子どものニーズは様々です。

まずは、実態を把握し、子どもをあたたかくポジティブな目で見ることが大切です。そして、その子の「好きなこと」「得意なこと」を糸口に、個に応じた支援や環境を工夫し、よさや可能性を伸ばしていきましょう。それはその子が「困っていること」への支援にもつながっていきます。

無理に集団に適応できるように保育を進めるのではなく、個に応じた環境をつくることは、決して「特別扱い」ではありません。支援を必要とする子どもが安心して生き生きと過ごせる環境は、他のすべての子どもにとっても過ごしやすいものです。また、支援を必要とする子どもと他児がつながることで、遊びや活動の幅が広がり、保育はより豊かになります。その視点をもって、ユニバーサルな環境づくりを進めていきましょう。

自分が活動する手順や内容がわかる環境

一日の予定がわかる

イラストや写真を用いて、１日のスケジュールを可視化することで、活動の見通しがつき、安心して行動することにつながります。

活動の手順がわかる

身支度が身に付くように、絵カードにして手順を示すことで、必要な身支度を自分で確認しながら進めていくことができます。

表面のボードにカードがなくなれば身支度完了！

できたことはボード裏のボックスに。

手持ちカード

- 必要な時に、必要なカードがすぐに取り出せます。
- 情報が多いと混乱する子どもに、一枚ずつ提示します。

片付け方、場所がわかる

写真を用いて片付け方を示すことで、決まった場所に、自分で片付けることができます。

個人ロッカーの使い方

表紙を前に～絵本の片付け方～

片付け方のモデルを写真などで示し、誰もがものを大切に扱いながら、気持ちよく片付けることができます。「きれいに片付けると気持ちがよい」という感覚を養うことが大切です。

気持ちが落ち着き、安心できる場の確保

　ざわざわした環境や、人がたくさんいる場が苦手な子どももいます。
　保育室の一角に、気持ちを落ち着け、クールダウンできる空間があると、集団生活が苦手な子どもも、安心できるかもしれません。

落ち着ける関係づくり

　こだわりや予定の変更、自分の意に沿わない出来事など、子どもにとっては、日々の生活で、様々な不都合に出会い、気持ちのコントロールがうまくいかない場合があります。
　子どもの思いに寄り添いながら、落ち着いて活動に取り組めるようにすることが大切です。また、子どもが自ら取り組もうとしたタイミングを逃さず、最後まで見守る、そんな安心できる、落ち着ける関係づくりも必要です。

思い切り体を動かして、心も体も成長する
～「にじいろ広場」での環境の構成～

拠点園（わかばこども園、さくらだいこども園、ささはらこども園、みずほ幼稚園、おぎの幼稚園）では、月に１回程度「にじいろ広場」を開催し、個別の支援を必要とする子どもとその保護者が集い、大型遊具などを用いて主に粗大運動を行い、心身の成長を促しています。

支援を必要とする子どもの保育環境　チェックリスト

＊見てわかる支援（視覚支援）

□ 毎日使う道具や教材がどこにあるのか、またどこに片付けたらよいか、見てわかるように表示をしていますか。

□ 生活や遊びのきまりが身に付けられるように、ことばだけでなくイラストを提示したり掲示したりしていますか。

□ 場面のイメージができやすいように、見本や具体物を示したり、画像や絵本、紙芝居、ペープサートなどを活用したりしていますか。

＊子どもが理解できる話し方や発問、指示

□ 状況によって、保育者の話す立ち位置を変えていますか。

□ 全体指示の後、必要に応じて個別に説明するなどの配慮をしていますか。

□ 一度に多くの指示を出さず、「これから、３つのことを言うよ」など注意を促し、簡潔にまとめていますか。

□ ことばによる指示や説明だけでなく、画像や絵など活用し、子どもに伝わりやすいような工夫をしていますか。

＊見通しをもち安心して過ごせるような工夫

□ 一人ひとりの興味や関心に合わせた遊具を用意し、安心して遊ぶことができる場を作っていますか。

□ 一日のスケジュールをホワイトボードに記入したり、１か月の予定を表にしたりして掲示していますか。

□ 予定の変更があった時には、できるだけ早くわかりやすく伝え、見通しをもてるようにしていますか。

支援を必要とする子どもの保育環境　まとめ

支援を必要とする子どもの保育環境として、何をポイントに構成しますか？

環境を構成した後、子どもはどのように活動しましたか？

子どもの姿から環境の再構成をどのように考えますか？

あとがき

～子どもの可能性を信じて～

乳幼児期の教育・保育は、「環境を通して行う教育」が基本です。

実際に「環境」をどのように構成していくかについては、第２章で示しているように様々な点を考慮することが必要ですが、何よりも目の前の子どもの実態を踏まえることが重要です。また、保育者が構成した「環境」は、子どもに「これをして遊びなさい。」と押しつけるものではありません。子どもが「やってみたい。」「面白そう！」と興味や関心をもち、子どもが自ら関わることが大前提です。

準備をした「環境」に対し、子どもが興味を示さなかったり、保育者の想定とは違った活動をしたりすることは多々あります。また、保育者が準備をした「環境」以外の場やもので遊ぶこともあります。しかしながら、それも「子どものありのままの姿」です。保育者が意図した「環境」の構成も大切ですが、想定外の子どもが見つけたもの、関わったもの、遊んでいることも同様に大切で価値あるものです。保育者は常に、目の前の子どもの姿を肯定的に受け止め、柔軟に「環境」を構成し、一人ひとりの子どもの資質・能力の育成に努めなければなりません。

本書で示している内容は、各年齢における「環境」の構成の一例であり、各施設で保育環境に悩んだり、迷ったりした際に参考として活用いただくもので、スタート地点となるものです。まずは「環境」を構成し、目の前の子どもがどのような反応をし、どのように関わるのか、どのような学びを得るのか。また、保育者の構成した「環境」の枠にとどまることなく、子どもが試行錯誤を繰り返し、自分たちで活動を展開していくことを期待します。そのため、各年齢における保育環境のチェックリストにまとめを記入するページを設けています。ぜひとも、「環境」を構成した後、子どもがどのように活動したかをしっかりと見取り、子どもの姿から「環境」の再構成をし、子どもと共に活動や「環境」を創っていくことを目指していただけたらと願います。

子どもは生まれながらにして、環境に関わる力を持っています。私たち保育者は、子どものありのままの姿から学び、子どもの可能性を信じて、教育・保育を推進していき、一人ひとりの子どもが自信をもって小学校へ入学できるよう、精一杯のサポートに取り組んでまいります。